

コロンボ日本人学校における国際理解教育の実践

前コロンボ日本人学校 教諭

大分県別府市立大平山小学校 教諭 佐藤 成一郎

キーワード：在外教育施設、スリランカ、国際理解教育、スリランカの産業、日本の技術

1. はじめに

スリランカで暮らす子どもたちにとって、学校の行き帰りや買い物、レストランや旅行以外で生のスリランカに接する機会は意外と少ない。自由に遊びにも行けず、日本で暮らすよりも閉ざされた世界で生活している子どもが多いものである。そこで、子どもたちには、できるだけ多くのスリランカ人に出会い、スリランカの体験をしてもらいたいと願った。

2. 実践の目的

日本とスリランカの素晴らしさを、そのどちらも知っていて広めようとしている、スリランカの陶器会社社長でスリランカ日本語協会会長でもあるダヤシリ・ワルナクラスーリヤさんと出会い、講話を聞いたり、工場で見学したり陶器に関わる体験をしたりする事により、ダヤシリさんの視点と自分の視点を比較して、スリランカのよさはもちろん、日本のよさも感じてほしいと思った。

3. 学習指導要領での位置づけ

この一連の学習は、スリランカと日本のよさをとらえるという国際理解教育という位置づけで行ったので小学校3年生以上は総合的な学習の時間で、また、小学校1年生は生活科の「身近な社会」の内容で扱った。総合的な学習の時間の配慮事項として「国際理解に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことをとおして、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにすること」とある。ダヤシリさんの目をおしてスリランカや日本の文化と社会を体感することを学習の中心に据えた。また、生活科の内容では「自分たちの生活は地域で生活したり働いたりしている人々や様々な場所とかかわっていることが分かり、それらに親しみや愛着をもち、人々と適切に接することや安全に生活することができるようにする」と記されている。日本と比較してとらえることで、自分たちが住むスリランカに愛着を持つことができると考えた。

4. IAの時間

コロンボ日本人学校ではInternational Activity（以下IAと略す）の時間を設けている。このIAの時間は、「国際社会で活躍できる力」をつけるために、各教員がもち味を生かしながら実施する授業で、コロンボ日本人学校の特色の1つである。IAの時間は、各教員が年間2～3時間、他の教員や保護者に授業を公開している。この時間に扱われる題材は、現地理解や環境教育、平和と戦争、文化と宗教、音楽、スポーツなど多岐にわたる。小学1年生から中学生までの児童生徒が、一堂に会して授業を受けるこの時間を使うことで、全校児童生徒がダヤシリさんと出会い、その話を聞くことでスリランカのよさと日本のよさを子どもたちに感じてほしいと考えた。



IAの授業

5. 学習の展開

(1) リランカのよさと日本のよさ

ダヤシリさんの話を聞く前段として、子どもたち自身の視点からスリランカと日本のよさをとらえさせておこうと、「スリランカと日本のよさランキング」を子どもたちが作る活動を設定した。全校児童生徒を3つのグループに分け、スリランカのよさと日本のよさと思われることをそれぞれ出し合わせ、ランキングをつけることで価値づけをさせた。思考ツールとしてランキングを使うことで、子どもたちは、候補を洗い出し、理由をもって比較する。そのことで、スリランカや日本のよさを、整理しながら考えることができる。

まず、スリランカのよさについてベスト3を挙げさせていった。グループの中で子どもたちは、「スリーウィラー」「カレー」「リス」などスリランカらしいものを次々と出していた。結局決まったのは、Aグループは、1：キャンディアンダンス、2：フルーツ、3：人柄の3つ、Bグループは、1：ポヤデー、2：海、3：リスの3つ、Cグループは、1：人が優しい、2：スリーウィラー、3：紅茶の3つをそれぞれ挙げていた。その理由としては、「笑顔で声を掛けてくれる」「いると癒される」「休みが増える」「日本にないものがある」などがあった。スリランカ独特の物の名前が多く出されると予想していたが、子どもたちからスリランカ人の優しさや人柄が挙がってきたことが嬉しかった。子どもたち自身も、スリランカ人と接する中でそのやさしさ、人懐っこさを感じていることが分かった。

スリランカのよさベスト3：例

Best	伝えたいのは？	その理由は？
1	ポヤデー	休みが増えるから
2	海	スリランカの海はきれいだから
3	リス	いるといやされるから

次に、スリランカに住んでみて改めて分かった日本のよさもベスト3を考えさせた。Aグループは、1：信号、2：譲り合い、3：食品の3つ、Bグループは、1：食べ物、2：コンビニ、3：飲める水道水の3つ、Cグループは、1：ごみをポイ捨てしない、2：食べ物が安全、3：水がきれいの3つがそれぞれ出されていた。理由として、「もっと種類があったら便利」「エレベーターなどで譲り合っている」「日本食が食べたい」「便利だから」などが出されていた。子どもたちは、スリランカの生活と日本の生活を比べて、日本の「便利さ」と「安全さ」によさを感じていることが分かった。

ランキングを比べることで、子どもたちがとらえるスリランカのよさは「人の優しさ」であり、日本のよさは「快適さ」と「安全さ」であることが確認できた。この活動をとおして、子どもたちに物のよさだけではなく、人や暮らしのことまでよさとして認識させることができた。

最後に、次時で講話をしていただくダヤシリさんを紹介して授業を終えた。子どもたちは、入学式や卒業式でダヤシリさんにお会いしていたので、スリランカのことや日本のことを教えていただけると聞き楽しみにする気持ちを持っていた。

(2) ダヤシリさんの講話

スリランカ日本語協会会長で日本語や日本のよさをスリランカで広めようとしているダヤシリさんの日本での経験や、日本の技術をスリランカで生かそうとしている意図などを直接子どもたちにお話していただくことで、ダヤシリさんのとらえるスリランカと日本のよさと、自分が考えるスリランカと日本のよさを比較してとらえることができ、より深い両国への理解につながると考え、この授業を設定した。何よりもダヤシリさんが日本語で語りかけて下さるので、子どもたちにとってより身近に感じることができると考えた。

前時の授業で自身による視点を持った子どもたちに、日本のことをよく知っているスリランカ人、ダヤシリ・ワルナクラスーリヤさんに出会わせた。ダヤシリさんは、日本の瀬戸市で陶器作りと日本式経営法を学び、帰国後、ミダヤセラミックを設立し、日本の陶器づくりをスリランカに導入して成功を収めるとともに、日本の経営や日本語をスリランカに広める活動をしている方である。講話の中でダヤシリさんは、商店を営んでいる両親が有名な学校に通わせてくれたこと、17歳の時に電球を製造・販売するためにインドで学んだが、うまくいかな

かったこと、その後、文通とおして知り合った日本人の援助で陶器作りを学ぶことができたこと、日本の生活に馴染むまでは苦勞をしたが優しい日本人に助けられたこと、そして、状況をとらえて新しいアイデアを出しながらセラミック工場を大きくしていったことなどを話してくださった。子どもたちは、ダヤシリさんの熱い語りじつと聞き入っていた。

ダヤシリさんは、スリランカのよさについては「相手のことを思う気持ちが強い」こと、「子どもを大切にすること」を挙げられていた。また、日本についてよいこととして、「段取りが上手」「きれい好き」「時間を守る」ことを話しておられた。ダヤシリさんが話され

ていたことは、スリランカは昔の日本に似ているということだと思われた。子どもたちが考えていたスリランカと日本のよいところに共通しているところが多かったので、子どもたちもダヤシリさんの話を納得して聞くことができていたのではないかと思う。また、それぞれの国の足りないところも話をして下さったので、子どもたちも改めてそれぞれの国を見つめ直すことができたのではないかと思う。日本に来たスリランカの人が、一様に声にするのが、「子どもに対する親の愛情が足りない」ということだと聞く。ダヤシリさんの話の中にもそのようなことが見受けられ、日本もスリランカに見習うべきことがあることも考えさせられた。

ダヤシリさんのお話を聞いた子どもたちは、ダヤシリさんの生き方に感銘を受けた感想も出していた。例えば、小1の児童が「自分から何かを作ろうと思ったのがすごいなと思いました」と書いていたことや、小6の児童が「もしかすると、そのうち自分も会社を立ち上げるかもしれないと考えるとワクワクします」と書いていたことなどその子どもに応じて様々なことを受け止めていることが面白いと思った。やはり、ダヤシリさんという人間自体が持つ魅力は、子どもたちにもわかるということがこの授業をとおして分かった。

(3) ミダヤセラミック工場見学

ダヤシリさんの講話を聞いて、子どもたちはダヤシリさんの工場に興味を持っていたので、ダヤシリさんの工場ミダヤセラミック工場を訪ねた。まずは、陶器作りの行程をダヤシリさん本人にご説明いただいた。その後、従業員の方に説明していただきながら、工場の内部を見せていただいた。工場では、ダヤシリさんが説明して下さったとおり、日本の技術が至る所に生かされていた。また、日本の改善システム「5S（整理、整頓、清掃、清潔、しつけ）」が行われている様子も見せて下さった。子どもたちは、日本の技術やシステムがスリランカで生かされていることに、大きな驚きを見せていた。ただ、それだけではなく、ダヤシリさんの工場では、絵付けに関してスリランカで唯一、世界でも有数の技術があり、その独自の研究開発にも感心していた。日本の技術を基本としながらも独自の技術を開発しているスリランカ人の勤勉さを知り、スリランカと日本のそれぞれのよさを感じていたようだった。

その後、子どもたちに、絵付けを実際に体験させていただいた。子どもたちは、好きな色を選んだり、スタンプを押したりしながら、思い思いに絵付けをしていた。実際に体験をすることで、物づくりの楽しさや難しさを直に感じる事ができた。

ダヤシリさんの工場を見学し、絵付けを体験することで、話を聞くだけではわからない、スリランカと日本が融合している姿を肌で感じる事ができた。

(4) スリランカ理解についての取組

コロombo日本人学校では、年に2回、地元の小中高校のアショカカレッジとの交流会を持っている。また、こ



講話をするダヤシリさん

のアショカカレッジとは年に3回の交流サッカーも行っている。同世代の子どもたちとの交流は、何よりのスリランカ理解につながっている。

その他にも、年に1度の宿泊学習で高校生との交流を持ったり、幼稚園との交流も持つことができた。さらに、学校関係だけでなく、警察署に見学に行って交通ルールの指導を受けたり、消防署で訓練の様子を見せてもらったり、漁港や魚市場を見学してスリランカの漁業や魚について知ることができたりした。その中で、日本から消防車が贈られていることを知ったり、スリランカの魚を使って寿司が握られていたりする様子を見て、スリランカと日本が多く場面に関わり合っていることを感じることもできた。現場に行ってみること、そして、実際にやってみることがスリランカと日本の双方のよさを知る何よりの方法であるということがわかった。

6. 終わりに

スリランカに住み、そこで生活しているからには、その国や人のよさを見つめ、感じてほしいと思う。また、海外にいるからこそ母国日本のよさも見えてくるものだと思う。それぞれの国のよさを考えることをとおして、より広い視野を持って世界を見ることができるようになると考えられる。だからこそ、そのような機会をできるだけ多く設定することは大変重要なことである。今回の一連の学習や体験でスリランカと日本のどちらのよさも知っているダヤシリさんと出会い、その魅力に触れ、その考えを聞くことで、自分の視点だけではない、より広い視野でスリランカと日本のことを考えられたことが大きな成果であった。